

## ある子宮脱のおばあちゃん

中年の婦人に付き添われて、小柄な老女が診察室に入って来た。白髪交じりの長い髪を後ろに束ねて背中を丸め椅子に座った姿は、まるで子どものように見えた。

「おばあちゃん、どうしましたか？」とカルテを手に取りながら尋ねると、「何かが下がってくるようで、●●●●●はばったくて(邪魔になって)歩きづらい」と少々甲高い声で話しかけてきた。目も口も達者なようだが、少し耳が遠いようである。75歳と記してあるところに目をやり、「元気だな」と思った。「いつ頃から具合が悪くなったの?」「もうずーっと前からだがネおめさん! おら、とっても●●●●●でしょうし(恥ずかしく)て来れなかったてば!」とこれまた甲高い声で笑いながら話す。すぐに膀胱脱(ぼうこうだつ)を伴う子宮脱の状態だと思った。診察台にあがるよう勧めると「おめさんのような若い人に、おら、とてもしょうじだてば!」と言いながら帯をほどき、診察の間中しゃべっていた。私の母親は85歳になるが、自分の息子のような年恰好の医師から診てもらおう事に大変抵抗を感じている様子だった。

「手術をするように」と話すと「開業医さんからも同じことを言われたから、一日も早くしてほしい」と答える。

付き添って来たのは北海道に住む娘さんで、「心配して来てみたが、しばらく新潟に滞在できるからその間に手術していただければ」と言われた。長い間、尿の出が悪かったり、歩く度に下がってきて不自由だったろうと思う。

手術日が決まり、ホッとしたのか何度も頭を下げてお礼を言いながら出て行く後姿には、高齢化社会を迎えた我が国におけるこれからの老人医療、老人福祉等山積みの問題を背負っているように思えた。独居暮らしであればなおのこと、下半身の事は中々相談しにくいようである。下着が汚れていることに気付いた家人によって連れて来られる患者さんも少なくない。

ほとんどのお年寄りたちは、この年になって迷惑をかけたくないとじっと我慢する人が多く、診察に訪れた時はすでに手遅れの状態ということも少なくない。

最近新聞紙上ではお年寄りに関する記事・悲報が連日のように報じられているが、お年寄りが苦しんでいる根本的な問題を掘り起こしているような記事はあまり見られない気がする。これからの社会を支えていかなければならない子どもたちの数は、出生率の激減でますます少なくなっている。外来でのこのおばあちゃんとの会話から、その生活を考えた時、高齢化社会、出生率の低下という問題にもっと真剣に目を向けなければと思う。

元気に退院して行ったおばあちゃんだが、相変わらずの新潟弁で茶飲み友達と元気に過ごしているだろうか。